

しかし彼女は降るほどある高貴な結婚の申込みを全部さけて、ほとんど自由結婚同様に氏と結婚してしまつたのであつた。

それは今より十數年以前のこととて、それからの新婦は、眞夜中より起き出でて、夫や若い者が配達に出る仕度の手傳ひを、せつせとやつたのであつた。冬の雪降りの時などは稚子を背負つて車の後押しをし、牛乳の配達も手傳つてゐた。

又古谷氏は、部下の訓陶を軍隊式以上嚴格にしてゐた。幾十人の部下は「時間々々」の一聲に必ずはじかれたやうに起きあがるのであつた。

得意廻りのために雇人が同業者と喧嘩をして來ても、必ずよろこんでこれを解決してやつてゐた。給料や報酬などは驚くほどの多額を惜しけもなく與へてゐた。

十年ほど以前ですら月收二三百圓の雇人は決して少くはなかつた。

かくして人を使ふことと、經營の上手と品質の精良に努めた事とが相俟つて、東洋一の大牛乳店の主人公となつた。氏は、その食料政策に對する自己の大きな抱負を、建設され

る帝都に生かさうと努力してゐる。

白髯老人は獨り庵にあつて得意な顔つきで、相かはらず白髯を撫してゐるであらう。

(小村落川)

## 二人の女性

### 上、我家の没落から新生涯へ

年の若い割に數多き同輩をぬいて、一部の人から前途を認められてゐた歌劇俳優の若山秋湖が、現在の歌劇そのものに愛想をつかしてはじめたのは、彼が二十の時であつたが、一方、人々から賞賛される快よさと、甘い淫蕩的な生活に慣らされた若い彼の心は、どうしても、その生活からはなれる事が出来なかつた。

それに、彼の心に深く喰ひ入つてゐる淺草舊見の政江と、今までの關係をつゞけて行くには、どうしてこの職業をつゞける必要があつた。

そして月々足りないがちの彼の小遣ひ錢は、下谷黒門町に父母と住んでゐる兄や、飽くまで我子に目のない母親の手から支給されてゐた。手に追へぬ道樂者ではないが、不孝な俸には相違なかつた。

彼は母や兄にたびたびの事とて無心がしくゝなると、弟妹の貯金箱をそつと引つくりかへして来るやうなこともあつた。おひおひ彼の行跡は目にあまるやうになつて来た。

年老し父母と兄が、よく眉をひそめて、彼の將來を案じてゐる夜が多くなつた。その年は暮れて彼も二十一になつた。

そして商賣や平素の操行に似合はず身體が頑健であつたと見えて、徴兵に合格し、世田ヶ谷の砲兵聯隊へ入營した。

一年ばかり何事もなくすぎたが、彼の入營して二年目の春兄が突然病没した。

商賣上のことから家計一切取りしきつてゐた兄に死なれた彼の實家は、灯の消えた夜道を行くやうなものであつた。

兄の残して行つた二人の幼兒を抱へて見すゝ家運の傾いて行く有様を、いらだちつゝも傍觀してゐなければならぬ母であつた。

弟や妹はまだ小供であるし、兄の嫁は兄より先にこの世には無かつた。

彼は始めて夢から覺めたやうに思つた。今さらながら我身の越しかたが悔やまれたが、軍律にある身の如何とも詮方なかつた。

遂に彼の實家は、長年住みなれた店をもちこたへられなくなつて、彼が入營して三年目の正月、即ち大正十年の正月、一家をあけて新宿三丁目に移つた。

それは下谷の店とはほとんど競べやうもない、さゝやかな店構へであつた。

彼は本心から泣いた。そうして必らず家を元通りにするゝ誓つた。しかし悪いことは續くもので新宿へ引移つてから三月目、大正十年三月二十六日、彼の新宿の大火に遭遇して

一家は丸焼けのうきめに逢ひ、箸も持たぬ乞食同様になりさがつた。それから半年のあひだ、どんなに彼は除隊の日を待たせらう。その間に可愛い妹は津守の藝者に賣られて、その金で四谷鮫ヶ橋の裏長屋を借り、夜はおでん屋の屋臺を張つて、一家はわづかに口を濡らしてゐた。そのうちに待たせた除隊の日が来た。

### 下、労働は舞臺に勝る楽しみ

彼が除隊した當時の一家はどん底にあつた。父はなれぬ労働に倒れて病褥に伏し、年老し母が變つておでん屋の屋臺のうちに坐つてゐた。弟は朝納豆を賣つて歸ると、兄の幼児の面倒を見、かたはら父の看護をしてゐるのであつた。

これから彼の活生活がはじまつた。彼は除隊した翌日から働けるだけ働いた。賃賃の

人力車を借り受けて、足のつゞかきり人を曳いた。又それより収入があると聞いて植木屋の日雇になつたり、崖などでシャベルを握つたりして命をかけて働いた。

が自分のほか一家五人を養つてゆくには、なか／＼容易なことではないのだ。彼はなほも撓まず身を粉にくだいたが、翌年の夏、大道のアイスクリーム屋でちよつと利益があつて、その金を内金に人力車を一臺買ひ込んだ。

人力車が自分のものになると復元の車夫にもどり一家を養つた。

以前のやうに、稼いだうちから高價な車代を拂はずにすみ、やゝ一家はその日に事をかかぬやうになつて来た。

彼はそれに氣を得てなほも懸命に働いてゐた。彼はやゝほつとしたやうに除隊後の己の行動を振りかへつた。

一年ほどの労働がいやが上にも身と心を頑健にしてゐた。労働のほんとうの面白がだんだん解つて来た。弟をいたはり、父母に仕へ、時々昔の歌劇時代の唄を唄つて一家を

笑はせたりした。

俳優當時の仲のよかつた友達に出逢つた時など、彼はなつかしげにその友と話し、法衣姿の現在をすこしも恥かしがらなかつた。

その友達の中から、彼の噂さはひろまつて行つて、聞く人は誰でも彼の異常な變り方に目をみはつた。

そして彼の愛人、淺草の政江の耳にもはいつた。彼女はすでに浮いた稼業に不安を感じてゐた矢先、昔の愛人の噂さに嚴肅にちかいほどの感慨に打たれた。

彼が二十六の年を向へた時には、彼の家に急に二人の女性が増えた。一人は形振りかまはず彼の父母につかへてゐる昔の淺草の政江で、いま一人は政江の持つて來た衣類や指輪を金にかへて、呼びもどして來た彼の妹である。

それからしばらく彼が、元氣に車を曳いて走る姿や、四谷の大通りでおでんを賣つてゐる政江の姿が見えてゐるが、間もなく彼等の姿はその界隈から消えた。

と同時に神田三崎町邊のとある横丁を曲つたところに、人力車の七八臺も持つた大きな車宿が開かれて、電話をかけたたりなにかして、かなり手擴く商賣がつゞけられた。いふまでもなく昔の歌劇俳優若山秋湖夫婦である。

想へばそれからなほ一年、今度の大地震はおそらく彼等一家にも襲つたであらうが、彼の不屈な精神まで襲ふことは出来なかつたであらう。

彼は身をもつて一家を擁しつゝも「なアに腕一本ありさへすれば」と深い決心を示してゐるであらう。(しげ子)

## 死線に立つて

## 上、残された父の債務から

柱三は父の死ともにもあらはれて来た生前の父の債務のため、今までの所有地所有物を全部人の手にわたしてしまつた。それは彼の廿五の秋であつた。

しばらく叔父のもとに世話になつてゐる中、彼は何かを畫策しつゝ、熱心に地理の教科書と地圖をしらべてゐた。そして丁度臨月である妻を叔父に托して、たゞ一人北海道に出發した。

彼は道さへ知らぬ、しかも榮華をきはめし時に育つた力業の何ものなるかも知らぬ人間であつた。それが函館にたゞ一人やつて来たのを、監獄部屋の見はりは決して見逃さな

つた。

「君！一寸君！」彼はまさか、自分を呼ぶのではないだらうと思つては見たが、ちよつと振り返らぬ譯には行かなかつた。

「はあ、僕ですか？」「えゝあのなんですか、失禮ですが君も何か御商賣を……」「えゝ」かうなつてはもうこつちのものだといはんばかりの見張人は、その儘彼を己の住居に連れこんだ。

柱三は仕事にありつくことを得たのを喜び、且つ後進者のためかうまでしてくれる人もあるかと思ふと有難かつた。それ程彼はこの見張人を信用してしまつた。

日給三圓、前賃七十圓、誰しもこれを選ばなければならぬやうな餌であつた。

うまうまと一ぱひ食はされたことを知つた柱三は、その日の勞働に出なければならなかつた。けれども瞞されたですましては居られぬ。同僚の話では命までも奪はれる。毎日のやうに川や鐵道線路に投げられる人が、何人あるかわからぬといふことを聞かされた柱三

は、もう一刻も居堪らなくなつたが、さればといふて逃走は、さらに命懸けである。

勞働になれない桂三は日一日と疲勞が重なつて來た。十八時間不眠不休、立ちあがることも許されずに、營々と資本主のために働かねばならなかつた。

機會をねらつてゐた桂三は十一月某日卒倒せんばかりに驚かされた。「おい皆出ろ、出て來い。」棒頭の一聲に彼等はちぢみあがつて外に出た。そこには彼等の同僚が慘らしくも二人馬の脊に縛りつけられてゐた。

「おい野郎ども、この奴らは今逃げやうとしたのだ。貴様等もこんなことをするとこの通りだ。奴等の見せしめのため今刑罰するから見ておれ。」といふや否や、腰にさしてゐた山刀を引抜いて縛した荒繩を切つた。

二人は手と足を縛られたまゝ地上に投げ出された。棒頭は落ちた二人を散々に踏み蹴つた。そして身動きもならぬ彼等を木にもたせかけて、やがて紫光りのする短銃をさしつけて射殺したのであつた。

見てゐた彼等は此のむごたらしい同僚の死を目のあたり見せつけられて、血の氣のある者は一人もなかつた。

### 下、生死の境に發見した金鑲

桂三の脱走の決心はいよいよ堅くなつた。彼は六時間の睡眠時間をすべて自分の床下の土を掘ることに人しれず費やした。

一週間の後、北海道の十一月！素足のまゝ彼は逃走した。目的もなく無我夢中で走つた。けれども馬の足にはかなはなかつた。

彼は遂に、捕へられるまでの近さに追ひつめられた。轟々たる谿川の音が目の前にひびいた時、彼はいつさんに走つた。

そして崖ともおもはれるところから谿川を目がけて飛び込んだ。銃の音が二つ三つ聞えたのを知つてゐるが、その後は知らなかつた。

氣のついた彼は、果して自分が生きてゐるかを疑つたが、正しく彼は生きてゐたのだ。けれども強くうつた足は立つて歩くことは出来なかつた。

空腹と寒さを冷たい谿川の水につないで彼は足を引きづりながら下流に下つた。極度の疲労で彼はつひに又そこに倒れた。けれども彼の顔に落ちて来た冷たい水滴のために支へられて永眠せずに助かることを得た。

何の氣なしにそれを見た。彼はその輝然たる光に驚いた。見よ、目の上約六尺ばかりのところ露出せる金礦があるではないか、跳りあがつて喜んだ彼は、もう空腹もなにもなかつた。三時間も経つてから岩からはがし得た傘大の金礦を、ジーツと見つめて微笑をもらした。彼はそれから谿川に沿ふて三日間は歩き通した……。

アイヌの情けに漸やく一ヶ月後に函館へ歸ることを得た彼は、その金塊を金にかへて、彼は市の撒水夫になつた。

さうして一錢、一錢、五年間を貯蓄に送つて、出来た金を一纏めにして、故郷の妻に送

り、彼女を呼びよせた。

彼が北海道にわたると間もなく生れた子供は男の子であつた……。

六歳になつた子供と六年目で再會した二人は、もう笑ひを忘れてゐた。

そして夫婦は又それから十幾年、その時の子供常雄が廿二年まで函館の撒水夫として働いた。妻は富士バルブの製紙會社に出勤して働いた。微々たる二人の収入でも十幾年の後には約八千圓の貯金が出来た。「おい、もう幾等になつた、おゝこれか、もうそろ／＼始めやう。」妻が差出した通帳をはじめ彼は見た。

そして彼は妻に話した。「かつての出来事を知らなかつた妻は、今さらに助かつた夫の命を神に謝し、且つあたへてくださった寶庫を開くべく誓つた。二人が二十二になつた常雄を市役所に残して、相携へて道廳を訪問して、その山を拂下の手續を踏み、許可を得たのはそれから三ヶ月後であつた。

一旦歸宅した彼等は、常雄を伴ふて、たゞ三人で其處、即ち桂三が生死の境の魔所に來

た——金礦は依然として頭上にあつた。只三人の工夫、一家内の工夫は骨もくだけるまで掘つた。そして彼等は他の工場に賣つた。

それが三年つゞき、その資本でわづかの工夫を雇ひ入れ、又機械を据ゑつけ、それ以來十年後の今日は、あの深山にどうして汽車が出来たらうと驚くほど、山また山の奥の金山に町が出来、電車がつき——汽車が通つた。

宮島柱三——その人は今十勝金山の主人として、北海道に唄はれてゐる。子供常雄は卅歳を越して今は若主人に——奮闘卅餘年——生命をかけての奮闘は見事に成功した。

(あきら)

## 幼主を守つて

### 上、二十七歳で三萬からの財

京都室町二條下るの帶地問屋に、私が奉公したのは大正六年であつた。

入店するや、いなや私に父母の愛から説き起して處世訓を諄々と話された一人の番頭さんがあつた。

心の中でなんといふ親切な小父さんだらうと、さつそく父母にこの旨を書き送つて、店にも親切に教へてくださる方が居られるので、幾分かさびしさをまぎらすことが出来ると思へたほどだつた。

二三日して先輩にあのお方は支配人さんだと聽かされ、あまりに人間味のあるのに、す



くなからず驚かされた。

支配人青木松次郎氏は、京都の生れで、なかなか親孝行の方、氏の父はいまだに元氣である。私は時々青木氏の孝行ふかきに感じ、幾度か泣かされた。

私とて、まんさら親不孝な男ではないが、氏にはとてもおよばない。これも氏の面影として私の頭に映じてゐる。

氏は私より若い十五歳の時、帯地屋に奉公されたのである。氏が入店間もなく、經濟界に大きな波瀾が起り、到るところ商家の破産を見た。勿論帯地界にも影響して店も破産の淵に瀕したが、主人は苦しいうちにも信用を維持することが出来た。

しかし肝腎の番頭連が店を見きつて飛び出し、あとに残されたものは、青木氏を頭に丁稚二人きりであつた。

一度不幸に見舞はれると仕方のないもので、氏の二十の時、主人は重き病を得て死去された。止むを得ず頭たる氏は、店の萬事をひきうけて整理し、負債の一萬圓を身一つに背

負ひ奮然として起つた。

だが今のやうな大きな店にゐるには經費が持たないので、主家を賣り拂つて六百圓を得、それを資本として主人の子供三人と丁稚二人を引きつれて、舟越タオル店の二階を借りうけ、主家を復活せしむべく奮進したのである。

當時矢代仁商店の支配人田中總太郎氏も、西村總左衛門の支配人の熊谷氏もたま、青木氏と同じ境遇にあつたので、三氏は共鳴して主家を再興すべく兄弟の契りをした。

そして三人は黙々として光明に向つてすゝんだ結果、青木氏は京都の帶地界の覇者となり、田中氏は御召界に名をあげ、熊谷氏は友禪界の大王となつた美しい挿話があるが、その事は後に話すとして……。

舟越の二階に引移つた青木氏は、主家の子供三人を養育しながら奮闘をつゞけ、二十七歳の春には、既に三萬圓からの財が積まれてゐた。

氏はこれで前借を全部返済し、一度賣りはらつた店を再び手に入れ、返り咲きと共に世

間に二萬五千圓の資金が出来たと發表して信用を一時にあつめた。勿論これは掛引で、實際は一萬五千圓だつたさうであるが、ちやうど日清戦争當時のこゝとてその後さしたる影響をも受けずに日はすぎた。

### 下、西陣帯地界の王となるまで

明治三十七年、日露の戦争が開始された。かうなると絹布類のやうな贅澤品は賣れない帯地などは勿論一大打撃である。金のない奴等は投げ賣りをやる。人々は警戒する、堪らないのは機業家である。後から後からとぞくぞく生産されるが、捌け口がない、土臺のない機業家は破産の浮目に逢ふ、その時である。

青木氏は店にも出勤せず、なにか考へてゐるが、俄に右へ走り、左へ走りして、ある日の暮方ひよつこ顔を出し、生死を共にして来た二人を一室によび、西陣の帯を全部買ふべくはかつた。二人は驚いた、今時分そんな大きなことをしては大變だと反對をした。だ

が青木氏は二人の言葉にためまつかう言ひ放つた。

この財産ならびに信用は俺がつくつたのだ。誰に氣兼ねする必要がある。買占めを行つて不幸にして失敗した所で、もとの店に歸るまでだ。

二人はいふべき言葉がなかつた。氏は臆て立つて金庫の中から風呂敷包を取り出した。その中には二十萬圓しかも現金ではいつてゐた。

店には九萬の金も怪しいのに、こんな大金が何時の間に融通されたか……氏は三十七の時、すでに四五萬圓の融通力を充分に持つてゐたのである。

二人はしこたま帯を買い込んで来た。時の仕入高は一百萬圓をくだらなかつたさうである。だが三月すぎ五月すぎても、品物は動かなかつた。店の者は慌てたが、氏は平然として「俺が聲を立てるまでは、一木たりとも賣つてはならぬ」と言ひ渡した。

金を貰へぬ機業家達はたまらなくなつて支拂ひの談判を持込んで来た。氏は店に積込である品物を機業家に見せて、静かにかう口を切つた。

「この通りにまだ品物は一本も賣つてはゐない。しかし諸君等から品物を受取つた時に、何割かの金を支拂つてある筈だ。して見ればこゝで店が五割の損をして賣つても諸君等への支拂ひに差支へるやうな事はないではないか」と得心の行くやうに話したので、機業家連は安心して歸つた。

一年間は苦しいうちにもすぎた。ある日のことである、白木屋呉服店から帯の大注文が来た。それが動機でぞくぞくと問屋ならびに小賣屋から注文がはいつた。店に來なければ上等の帯を買ふことが出来なかつたからである。その純利益三十五萬圓、かくするうちに百萬圓の富がつくられた。

その時には主人も大きくなつたので、後見を二人にたのみ、青木氏は茶や俳句、繪畫に親しみ、十徳寺の一屋を借り受け、禪學を研究しながら靜かに餘世を送つた。

併し日に一度は必ず主人を訪つれ、いろいろと昔の物語りをしたり、我々に禮儀上のことについて教へて下されたりした。

私をはじめて氏を知つた時は、既に商賣をはなれて居られたので、彼の人々が色々な計畫を立て、來た人とは見えぬくらゐだつた。

氏の人望は非常なもので西陣方面では、青木氏の死後には、必ず石碑が立てられるだらうと噂されて、否、計畫されてゐたが、大正十一年の一月十七日、新町二條上るの自宅に於て、義兄弟たる矢代仁商店の支配人田中氏に末期の水をもらひながら、安らかに五十六年の生を終つた。(佐藤信一)

## 失望から甦つて

### 上、投身する刹那の悟り

「人間一生、裸で生れて裸で死んでいくのだ。立派な男一匹が同じ人間同志がこしらへた

金ぐらひに脅かされて、泣いたり、笑つたり、夫婦兄弟親子が掘みあふなど、馬鹿馬鹿しい。五十年も百年も長壽しやうと自分勝手な考へを起すから、澤山な金が欲くなるのだ。人の懐中にまで長い手を出したくなるのだ。

五十年もの長い期日の安定を一ヶ月や一年で獲得しやうとするから無理が出来て来る。明日の日、死ぬか灰になるかと判断できない頭腦や眼で、ながい將來がどうして憶測出来やう。自惚れが強すぎる、私はもう今日から明日の日がないと思つて働いて見やう。

明日の日がないと思へば、着物にも食物にもなんの執着があらう。さうだ。さうして今日仕入れた商品は損をせぬ範圍でどこまでも今日の中に賣捌いてしまふやうに決心しやう。物は考へやうだ。明日ない生命と思つて無茶な亂暴や榮華にふければもし萬一明日生命のあつた場合にそれにも増した苦惱を忍ばねばならぬ。

さうだ。その決心で働いて見やう。駄目なところで、今この河で死ぬ生命がその日まで延びたと思へばまんざら無駄骨でもあるまい。」とは、好漢、藤野玉吉がやうやう廿七の男

盛りまでの辛苦艱難の賜物を一朝にして奪ひさられ、聞くにたえぬ嘲笑惡罵に憤怒の結果秋立ちそむる十月十九日の夕ぐれ、天壽の神の命を隅田川の飛沫に消さうとした瞬間、星のごとく輝いた彼の良心に奮起され、再生の一聲として大言したモットーであつた。

彼はその當時、傳馬町の某商店から卸し荷を受けて、市内及び近郊の得意先へ半襟を専門に、帯地などを賣捌きながら、向島の請地町に夫婦差し向ひで暮してゐる香氣な小商人であつた。

しかし彼がお店に辛抱した小僧時代からの十四年の歳月は回想するさへ涙を誘ふ程度の暗黒面ばかりであつた。

遊蕩兒の父親は彼が一年の辛苦によつて、漸く與へられる五圓の給金を一夜で煙りにしてなほ飽き足らずに、主家の勝手口へ來ては、主人に叩頭の百万遍を繰返すほどの強の者であつた。

母親は淫蕩のはて、情夫と手をたづさへて失踪したきり、なんの沙汰もなかつた。

姉は近隣の風紀をみだす禍根のごとく衆人に蔑視され、たゞ一人残されてゐる末の妹は、彼がすべてを犠牲にして父親に拂ひつゝあるわづかの金で興業師に賣り飛ばされる事から脱れてゐる始末だつた。

主家では皮肉な嘲笑の的となつてゐた。しかし彼にはそれ等の苦悶や惱みを慰めるあたにかい平和な菓は、生れて以來彼には與へられない畫餅だつた。

そしてこの主家の苦痛と家庭の不淨よりのがれ、妹を人間にするにはたゞ一つ彼の獨立があるばかりであつた。

### 下、留守の間に破壊された幸福

奸漢玉吉の努力はけつして徒勞ではなかつた。蒔かれた種子は春の恵みをまつて芽を出した。

彼は毎朝傳馬町の店から、矜や帶地を借り出しては、辨當持ちの勇姿を得意先に現はし

た。

一週間に残品をととのへて主人の前にすわる彼の懐中には、絶へずいくらほどの現金が残るやうになつた。

しかし彼はその當然自己の所有たるべき金の大部分は、これを主人に預けて、主従とはいへ、品物を借り出す保證金として置いた。

放蕩者の父親はこの有様を見て有頂天になつて喜んだ。姉は小使に不自由しなくなつたので、好い旦那でもさがしあてたやうにチャホヤした。

妹は好きな學校へ行けると聞いて、子供心にも彼に抱きついて泣いたほど活潑になつた。

出奔して行方不明になつてゐる母親のほか、玉吉の眼に映ずる者は、頭腦に感じられることは、すべて純な楽しい結晶のやうに思はれた。

姉の情夫が入婿する話がきまつたので、彼は請地のほとりへ新妻を迎へて、別居生活を

するやうになつた。

しかし矢張り一家の經濟上の負擔は全然彼の責任として別居と共に荷はねばならなかつた。

至純な彼が別居したことは、彼の父親や姉をまた以前の救ひ得ぬどん底に陥し入れることだつた。

姉の情人の策に欺かれた父の心は、母なき後の寂寥な父親の心は、一人の女の前にすべてを、何ものをも抛つてしまふほどに悪化された。

姉もまた同様に、情人の膝の暖かさの享樂には、兄弟の肉をけづることをも辭せなかつた。

十月の十九日は來た。姉の情人の巧言にあざむかれて、妹をつれて年に一度か二度の淺草行きを敢行した玉吉は、その日の午後十一時、一人待つ新妻への心ばかりの土産物をもつて歸つた。

そして彼は泣き叫ぶ妻の口から、留守中わづか三時間あまりの間に行はれた、金のために盲目にされた人間共の、父親や姉のあさましい争ひを聞いて、廿七の今日まで生存して來た自分の命を呪ひたいほど驚愕した。「死ね、なんのために生存して來たんだ。なんのために玉吉を親や姉は世に出したんだ」韋駄天のごとく駈けつけた父親の家には品物の影もなく、父親は廊へ、姉は情人の膝を枕に酔ひ倒れてゐた。

二度目に駈附けた傳馬町では、保證金だけでけりがついたものゝ、今後の出荷に對しては絶對拒絶の宣告を與へられた。

若き青年の彼として、此の場合死を期したのもまた無理からぬことであつた。

しかし好漢玉吉は、その瞬間再生の歎喜に目ざめた。當時からすでに二年は経過した。健實と廉賣をもつて小賣商人仲間を壓倒した彼の營業振りはすでに成功の域に達せんとしてゐるが、不幸にも彼は又、この震災に身をもつて逃れるの悲境に蹴落された。

しかし彼は必らず將來何事かをなして再起することゝ信じてゐる。(かれひき生)

## 十人の兄弟

### 上、楽しみを知らずに働きつゞけ

それは私の父の話なのである。來春は六十七になる父についての事なのである。私の故郷は大和の葛城山の麓であるが、父の生家は代々近村九ヶ村の大庄屋であつた。

不幸な事に私の祖母にあたる人は、父がまだ四つの時に亡くなり、つゞいて祖父も逝去した。

父は八歳であり、兄が十四才であつた。大庄屋といへば土地の名門ではあるが、なにかといへば御用金を申しつける幕末領主の苛斂誅求に悩んでゐて、あまり財産もなかつたので、父の兄が家をついだ頃には、勿論大庄屋は親戚の者が代つてやることになる、只の水

呑百姓になつてゐた。

やがて兄が二十になり父が十四になつた。そのほかに二人の異母弟と一人の實妹とがあつた。後妻であつた異母弟の母は祖父より先に亡くなつてゐた。

子供たちばかりの生活が如何に心ほそいものであつたか、そして彼等幼き者たちが、小さな額をあつめて、如何にけなけな決心をしなければならなかつたか？

遂に父とその兄とは、知人に教へられて賣藥の行商に出ることになつたのであつた。彼等は吾等の想像もよばぬ不便さをかして、熊野高野の深山にさまよひ、由良の瀬戸を舟渡りし、ちやうど鳴門順禮のやうに、怖ろしいやら、悲しいやらの數々を身にしみくと味はつて、國に残した幼い弟妹を思ひ、たよりない浮世の艱苦にしのびかね、幾夜か堅い宿屋の蒲團の中で兄と弟とが手を取りあつて泣きあかした。

かくして二十歳の時、私の父はやはり一門の士族の家を襲ぐことになつた。養家には十になる娘がゐて、養父はそれと父とを結婚させるつもりであつたらうが、一三年して膠溢

血ではかなくなつた。

青春の時代が彼にめぐつて来た。彼ははからずも意中の人を得た。その人もはやく両親に別れてたよりない身であつた。

この戀が三年つゞいて、彼等は廿五と十九の時結婚した。養家の娘は十五になつてゐて早婚ではあるが他家へ嫁入らせた。

父は總ての財産をこの娘の持参金として、村一番の財産家であつたので、嫁いだ家は福々になつたが、父は又無一文になつたのである。

しかし彼は今や悲觀することはない。どんな苦勞でも押しきるだけの力は、妻の健やかな微笑によつて無限に生れ出づるものであつた。

かくして彼は一年の半ばは妻の見知らぬ他國で暮した。旅から旅へ！、小さな家庭！愛する妻！そして可愛い子達よ！

四十の年まで彼はその生活をくりかへした。やつとその頃ちかくの町へ出て藥種商を開

くほどの基礎を得てゐた。

### 下、父母が残してくれた實

しかし生活は決して豊かではない。子供が次々と生れて来た。そしてそれが又不思議に男ばかりであつた。

彼の愛妻即ち私の母は五十五で亡くなつたのであるが、その時一番末の子供が十才であつた。そしてそれが十番目であつた。

私の母は典型的な主婦であり、且つ又母性愛の権化であつた。私一人の記憶をもつていふなら、五つから七つまで全然二年の間、眼病の名醫をたづねて、二里の道を自らおんぶして通つた。

私は此夏吉野川の名邑下市に、年古く召使つた老婆を訪ねた時、彼女は涙を流して語るのであつた。「妾は勿論、奥様のせなかに、床へ入らないうちは一時として、誰かをおんぶ



しないことはありませんでした。夏などは始終脊中はたゞれてゐました。かうしたなりで夜は十二時まで米を搗き、機を織り、畑へ出ました。

そして自分は着るものも着ないで、可哀さうな人達にはつとめて恵んでおやりになりました。全く他人目にも涙がこぼれましたよ。お隣りで啞の子が出来た時など、雪どけの道を一月もお稻荷さんへ日参に裸足であがりました。かうして母は働きつゞけて、十人の子を育てあげた頃、何の楽しい目もみずに死んでしまつた。

いやそれは間違つてゐるかも知れぬ。彼女にとつて、子を育てることは何よりの楽しみであつたらうから。父は今長兄に世を譲り、多くの名譽職を帯び推されて區長をしてゐる。

父の兄は昨年役場で卒中で亡くなるまで二十八年間村長をしてゐた。私は父と伯父とのなごやかな對話を今にきくやうな氣がするのである。

然して私は、今私達の父母が、自分達の生活をきづくために總てのものを投げ出した勇氣よりも、又彼等のための苦闘よりも、その蓄へ得た財産よりも、もつと喜ぶべきものを

與へてくれたことを云ひたいのである。

それは十人の私達兄弟に恵んでくれた父の温かい清教徒的な風格と、母の賜物であるなごやかな愛情と熱烈な信仰とをもつて、十人一身のごとき人間味三昧にあらしめたことである。

月日はめぐる、長兄は家をつぎ、次兄は建築をもつて起ち、三兄は縣下一流の製菓業を営み、四兄はある工業會社を経営し、五兄は某遞信局の電氣課長の職を奉じ、六兄七兄共に農牧を業とし、吾は法律を學び、二弟は中學に在學中である。

長い間の苦闘、糟糠の妻なき悲しみ、それを思はせる幾條の太い皺はあつても、平和な家庭に孫たちに取りまかれた時、微笑でとける時もある。

永久に開かれない亡き母の墳墓よ。私は靜かに靜かに過去の塵をとりあつめる。憶ふに斷腸切なるものがある。(宮清次)

## 誘惑に勝つて

## 上、呪はしき村人の冷酷な眼

詩に文にその情緒的な風光を謳はれて、若人の胸に情熱の象徴のやうにひびく南國の、不知火で名高い有明の海、その女波男波をゆるやかに寄する肥前の磯邊の一寒村、多良岳の麓七浦村の鬱蒼たる鎮守の森の椎の大木に、幾十年の星霜にも歴然と残る一行の文字には、聞くも男々しきローマンスが残つてゐる。

日々の漁りではそらくと浮世を渡るこの村に、良吉といふ青年がゐた。

田舎に珍しい眉目秀でた男らしい若者で濱邊に貝拾ふ村の娘達に随分と騒がれるにも似ず、つひぞ浮名を立てられたこともなく、父親死んだ後の阿母相手に、實直に働いてゐ

た。

白波の彼方の夢のやうに浮ぶ肥後の山々を見ながら、母親と二人で、小さい時から鍛えた腕に力をこめて舟を漕ぐ良吉は幸福であつたが、月に叢雲、花に風の定理、良吉は幸福の世界から悲しい荒波のどん底に突き落されたのである。

といふのはこの村に久六といふ宮相撲の小結にもなる力自慢の無頼漢の男がゐた。別に一家を持つてもなく、いつも酒に酔つては村人に無理難題を吹きかけるので、いつともなく敬遠主義を取られてゐた。

その男が盆踊りの夜から良吉の家に、親切ごかしにしげく出入するやうになつた。

當座の間は良吉も氣にもとめずゐるが、村の夜學から夜ふけて歸宅する時など、睦まじく酒など飲んでゐる二人を見ると「まだ年でもないから男も欲しからう」など嘲笑半分の村人の噂も思ひ當つてひそかに心を傷めるのだつた。

いつか母親に忠告しやうと思ひながらもついそのまゝに過す間に、久六と阿母の間は断

ちがたい腐れ縁となつてゐた。

あまりの苦々しきにある夜良吉は網繕ふ手をやすめて暗に阿母に忠告したが、戀に盲目となつた阿母は不機嫌に黙りこんでしまつた。

つひ良吉も痛い事を言つてその翌日頭が痛いといふ阿母を残して一日漁つて、赤い灯のちらほら見える晩景に歸へつてみると、良吉は呆然としてしまつた。

久六に心の狂つた阿母は、生みの子の良吉をすてて、家財道具から少しばかりの田地に命の綱とたのむ小舟まで賣拂つて、久六と二人手に手をとつて駆落してゐた。

生の母親にまで捨てられた良吉を、無情な親類達は見向きもしなかつた。ほんとの腕一本になつてしまつた良吉は、慰めの一言もかけてくれない冷酷な村人に、燃ゆるやうな反抗を覚えて、思はず鎮守の森までたどつて行つた。

椎の木に怒りにまかせて自分の名を刻んだ良吉は、成功せずんば再び見るまじとの意氣で、その足で佐世保まで、十幾里の路を徒歩で飛び出したのであつた。

### 下、孤獨の主人を救けて成功

眞裸で田舎から佐世保に飛び出した良吉は、先づ食はねばならなかつた。

飢と疲勞に眼のくらむやうな身體をひきづるやうに歩いて行く間に、ふと店員入用の紙に氣がついて、救はれたやうに菓子屋へはいつて行つた。

不意に田舎者の侵入して來たのに驚ろいた主人は、良吉の素朴ながら熱心な態度にひかされて店員にすることにした。

店員といつても菓子製造の見習ひで、新參の良吉は、女中のないその家の飯まで炊かねばならなかつた。

が、正直に働いた。朝は四時頃から起床して飯を炊き、晝は荷車で小賣店に卸して歩いて、疲勞した體を店に戻つて來ると、夜更けまで菓子をつくるのであつた。

さうした店の仕事以外に、古參の店員達の不當な酷使にも、良吉は反抗することが出來

なかつたが、ちつとしのんで狭苦しい氣象のあいだに働らいた。

しかし朝早く星をいたゞいて、水道の水の手をきるやうな冷たさを我慢して米を洗ふ時などは、自由であつた故郷の生活が想ひ出され、男二十一にもなつて意氣地なく飯炊女の眞似なぞしてゐる自分の慘めさが思はれて、思はず熱い涙を流したが、思ひ直して人々の起さないあいだに一仕事してゐた。

しかし馴れるに連れて、仕事に興味を持つやうになつた良吉は、藝者あがりだといふまだ若い婀娜なお主婦に誘惑の魔の手をかけられてゐた。

他の者の蔭でなにかと親切にしてくれる主婦が、湯上りの豊満な肌も露はに、それ者らしい器用な手つきで化粧などしながら觸れれば落ん風情をするのを見ると、あれほど固かつた良吉の心も怪して慄へた。

そんな時良吉はやうやく心に鞭撻を加へて仕事に身を入れるのであつたが、爛熟した女の匂ひを前にしては、實に危いもので惱ましくもだへた。

この女は多情な女で、主人の人のいゝのをよいことにして、顔の綺麗な店員だと見ると誘惑して、さんぐ弄んだあけく、厭になると一寸の失敗を口實に追ひ出すのであつた。

そんな例は澤山あつた。多くの男がそのたの一生を棒に振るのを知つた良吉は、ますます心をしめて眞面目に働らくので、流石多情な主婦もどうすることも出来ずに、一番古參の店員と駆落してしまつた。

愛妻を失つて、氣の抜けたやうな主人を馴ました良吉は、奮闘努力して店を擴張し、新たに麩麩を製造した。

星霜十年の後には良吉はあらたに獨立した店を持つて堂々たる經營振を示し、パンの上にもまたカステラの製造を研究して賣り出すと、本場の長崎のそれより質に量に勝れてゐると名聲を博した。

それより五年の今日は、良吉の店は素晴らしい發展を遂げて、その販路は九州一圓、京

阪地方まで及んでゐる。斷ちがたい女の誘惑に對する良吉の意志の強さは、彼をして今日のやうにあらしめた所以である。

白波よする有明の磯邊には、今なほ鎮守の森が鬱蒼として繁茂してゐる。(みさほ生)

## 男になるまで

### 上、小雀を懐ろに北海へ

濕つほい本所太平町二丁目の一隅、数棟の棟割長屋の中の一軒、その家の中から毎日のそがしさうに電話のベルの音が響いて来る。

その日稼ぎの労働者や職工等、雑然として生活するこの街に珍らしい電話の響き、近所の大供子供達まで珍らしさうに家の中をのぞきながら通つてゆく。

土木請負業畑田徳次(假名)數十人の乾兒を指揮號令して、天晴土方町場の親分になるまで、事實腕一本を資本として、富はなくとも男として家名を再興した彼の苦難、それには彼の過去の悲しい物語りと、それに發奮して不撓の努力をつくした精神こそ、彼を今日の名聲を築かしめたる基であつたのだ。

彼は西のはて筑前博多の産れである。豊かであつた彼の家の資産は、種々な事業の手違ひから、彼が小學校ををはる頃にはまつたく傾いて、その日の糧にさへも困難をつぐる状態に陥つてしまつた。

剛氣をほこる九州男子の血を受けた彼は、僅かに十五歳の少年ながら家運の衰へを見て拱手することは出来なかつた。

十五歳の時、決然として僅かの旅費を懐ろに、山雲千里はるかに東都の空へと志したのであつた。

花の都 文字通りの都の地は、この健氣な少年の志を完ふせしむべくあまりに花やか

であつた。浮薄であつた。

彼は苦學を目的として日本橋材木町のある酒店に住みこんだ。地理さへわかれば學校へ通つてと將來の成功を夢見てゐるうちに、彼はある公休日、淺草公園のT館で活動見物中隣席の少年と知合になつた。

少年はいろ／＼な話をした。その少年は淺草界隈を荒しまはる不良青年の手先であつた。死すともこの志しを忘れまじと決心した彼も、やはり人の子であつた。その少年の甘言に欺かれて、遂に彼はその仲間に加つた。

それから廿歳まで一定の職業もなく、轉々として不逞の歲月を送るうちに、彼の姉は彼の悪行を案ずるのあまり遂に病を得て筑紫のはてに冷たい夕の煙と化してしまつた。

彼の名を呼びながら冥府へ旅立つた姉の悲痛な死を聞いた彼は愕然として夢から覺めた病弱の兄は泣いて彼を諫めた。

廿一歳の春、永いあいだの放縱な生活から脱した彼は、自己の進むべき道をもとめて、

府下龜戸町にあるセルロイド研究所の職工として、歩一步と己の基礎を築くべく努力をつづけて來たのであつた。

しかし運命の神の惡戯の手は健氣な志しを持つこの青年に再び災した。龜戸町の資産家蓮沼家の養女であるS子は彼に戀した。

前途の希望に燃ゆる青年の心に、大きな波瀾は再び渦をまきおこした。親兄弟を捨て、もとその全身の愛を要求する彼女の愛に引かれた彼は、廿三歳の風まだ寒き三月、頑固な養父の手許から脱れて來たその小雀のS子を抱いて遠く札幌の地へと脱れたのであつた。

## 下、土工となつて刻苦八年

札幌へ脱れ、彼は友人の好意でO家に引取られた。O家はその土地でも知らるゝ土木請負師の一人で、その男らしい事業は彼の心を捉へた。

そして凜烈な土地の寒氣に、兎もすれば撓まうとする、彼女を勵ましつゝ、彼は楽しい

刻苦をつとけてゐたのであつた。  
 數ヶ月の後、彼女の家に驚いた蓮沼家では、八方手をつくして二人の所在を突き止めた。

そして甘言を以て二人を連れかへつたが、歸京と同時に慘酷な魔の手は二人の頭上を下された。己の有する富を以つて最大の寶とし、又何人にも一指をも觸れさせまじとする養父には、この資力のない青年は路傍の芥にも等しかつた、あらんかぎりの侮辱の言葉は彼にくだされた。

そして、その娘の愛人としてあまり世の無力なるを、彼女の面前で彼を罵つた。張り裂くやうな憤怒を押へてその家を飛出した彼は、その夜寝もやらす泣きあかした。

九州男子、精悍の血をついだ男の子として、いかでこの恥辱を雪がすにおかれやう、ほとんど逆上した彼は蓮沼家のすべての人を呪つた。

彼女の家を襲つて、血の滴りを見やうとまで焦つた彼も、懐しい愛人の訪れやなきと果

敢ない望みをつなぎながらも、その日の糧にも追はるゝ身の詮方なく、職を求めて土工の群に投じたのであつた。

待ち侘びた愛人は遂に彼の許を訪れなかつた。

彼女は彼が生活のために土工となつた事を知つて、忽ちに彼を裏切つた。

社會の人からほとんど人間外視せらるゝ土工夫、彼女はかたい誓ひを一片の反古として彼をすてゝしまつたのであつた。

土工なるが故に愛人は自分を捨て去つたのだ。かう思ふ時彼は怒つた、そして泣いた。口惜しさに彼は幾夜か男泣きに泣いた。

この時彼は決然として振ひ立つた「俺も男だ」と一語した彼は、その日から生れ變つたやうな男になつた。寒風肌を刺す冬の日も、鐵をもとかさむばかりの夏の日も、街に車を挽く、慣れぬシャベルも力のかぎり振つた。

ある時は船頭となり、ある時は線路工夫となつて刻苦八年、遂に彼は不撓の精神をもつ

てその土臺を完全に築きあげた。

彼が滿身の覇氣をもつて一層社會に勇躍を試みやうとした時、突如として大震災は起つた。

彼の家は附近よりの出火のため、家財一つ持出すことを得ず、再び裸一貫になつてしまつた。

しかし飽くない彼の精力と過去に蒙つた彼の精神的刺激は、帝都復興の第一線に立つて彼を奮闘せしむべく充分であつた。

腕一本、眞に腕一本を以て彼は今焦土の帝都に、新しい都と、そして又自己の復興とに努力しつゝあるのである。(流葉生)

## 廣告の秘術

### 上、縣廳の給仕が豆雜誌の社長

快漢千草道人は、伊豆國下田奉行の配下、吉永某の獨子として生れ、明治の初年母君と共に横濱に移住したのである。

母なる人はめづらしい賢夫人で、亡夫の片身なる道人を教養するに、寛嚴ともに宜しきを得、道人も亦年にまさつた智慧を持ち、近隣の人々は、坊ちやんはすに立派な人にならうと褒めたゝへぬ者はなかつた。

母君は親戚の誰彼の勧めにしたがひ質屋を開業せしものゝ、慣れぬことゝて思ふやうに繁昌せぬより、斷然それを廢業し、もつぱら生活を簡素にして、道人を横濱學校に入學さ



せ、その成長を樂しみに淋しき月日を送つてゐた。

蛇は寸にしてその氣を現はすの譬へのごとく、萬事に負けぬ氣の道人は學校の成績も人後に落ちず、母君も喜んでゐたなれど、資産には限りあり、なにか收入の道をもとめねば如何に母子二人とはいへこの後心細からんと、知人某の肝煎で神奈川縣廳の給仕に出たのは彼が十一二歳の時であつた。

流るゝ月日に柵なく、彼も一個の青年となり、勸業課の雇員として活動し、その敏捷なる執務振には同僚も眼を聳だて、課長E氏も彼を愛し、前途を囑望して居たところ彼志小ならず、將來は無冠の帝王新聞記者となつて天下に雷名を轟かさんと放言し、執務の餘暇に論文又は小説を起草し、縣廳出入の活版屋を口説き落し、千草双紙と稱する小形の雑誌を作り知己友人に分配して大に得意の體であつた。

さまで學問の無きにかゝはらず、見様見真似の筆鋒するどく各方面の批評などあまり無遠慮にすぎたので、課長はじめ肝煎の人々も心を痛め、懇々注意を加へたところ、蚊の聲

ほどにも感受せず、遂に縣吏の職を抛ち豆雜誌の社長となつた。

かくいふ筆者を始めとして二三の向ふ見すが馳せ加はり、それ〴〵部門を分擔し、力一ぱい働いたが、なか〴〵思ふやうに算盤がとれず、その頃五代目菊五郎が萬座へ乗り込み小問物屋才次郎を勤めた狂言の筋書を編輯し、かなり手際に出來あがつたが、表紙などあまり立派にしすぎたため勘定合つて錢足らず、美事失敗に歸してしまつた。

一面は利かぬ氣の腕白で、一面は大孝心の道人も、戦初めの失敗で一時は青菜に萎れてゐたが、根が剛腹（後年には星享と綽名された）な男ゆゑ、なんとかして血路を拓き母の心をやすめんと、いつの間にか資本主を見出し、花咲町の河岸どほりに一家を借り受け旅館開業とまで漕ぎつけた。

無冠の帝王前垂れがけて帳場に据はり、宿帳をひねくつて見たなれど、地の利を得ぬのが原因で千客万來は實現されず、これまた廢業の憂目を見た。

愈々進退谷まりいかに藻掻いても浮ぶ瀬はなく、身一つならばどんな冒險をも試みんが

母に苦勞をかけまじと思案に思案を重ねたする、圖らず一大機會を捕へた。

### 下、口も八丁手も八丁の商略

今でこそ性慾に關係した書籍や賣藥の廣告は、新聞雜誌に數へきれぬほど並んでゐるが明治二十年ころまではさういふ種類の廣告は容易に出すものがなかつた。

千草が新藥滋強丸の廣告に、都鄙幾千万人の膽玉を奪つたのは、全く彼が天來の智囊から物すごくも組立てた妙不可思議な廣告文の力であつた。

彼の親戚に菊池某なる醫師がある。彼はその醫師といろく研究の結果精力増加の藥劑を案出し、それを滋強丸となづけてこれを天下に賣擴めの手段として廣告利用の秘術を工夫し、見る人をして一讀驚嘆せしむべき奇言妙句を書きつらね、しかも人間の弱點急所を覘つて靈効を述べたて、老壯男女の差別なく是非一度は試みたしとの慾念を惹き起すやう巧みに仕向けたものであつた。

都下の有力なる新聞雜誌に破天荒な大廣告を出すのみならず、日本國中あらゆる新聞雜誌に向つて、例の奇字妙語で組みあけた廣告文を出したので、注文の殺倒は驚くの外なく俄に人を入れる、家を借りる、一家寝る間もないほどの大繁昌を來した。

今の仁丹や中將湯もこの時分はとも現時の勢力はなく、昔から賣込んでゐた寶丹、實母散その他名代の藥店も、旭日冲天の威勢を逞しうせる新參者の滋強丸の權幕に蹴倒され呆れはてたる有様であつた。

何分當時の住宅ではどうにも始末がつかなくなり、尾上町六丁目に堂々たる一棟を構へ滋強丸本舗として同業界を眼下に睨み、京濱京阪に支店を設け天晴斯界の重鎮となつた。持つて生れた剛膽はこの成功で満足せず、財界の怪傑平沼專藏を向ふにまはし、ある時は辛辣なる筆鋒を敵の眞向に振り翳し、ある時は懸河の熱辯を振るつて敵の肺腑を扶るなど、獅子奮迅の偉力を發揮し千草の名聲を轟かせた。

あくまで順風に帆をあけた彼は、花々しく東都に乗り出し、一快戦を試みんと築地二丁

目河岸通りに赤煉瓦の城廓を築き、滋強丸本舗タイガー商會の金看板をかゝけ、藥業界に雄飛するのことは千草双紙を新世界と改題し、政治、經濟、教育、文藝、すべての方面に筆陣を張り操觚界にも異彩を放つた。

三面六臂の精力を具備した彼は、進んで葭町に藝者屋を開き、なほ淺草に洋食店を經營して佛蘭西料理を呼物とし、多くの美形を極めて高尚に粧はせ、文士、新俳、紳商など中流以上を定連たらしめ、満都の洋食店に泡を吹かせ、雷門よか樓の名を十二階より高からしめた。

區會より市會、市會より府會、府會から衆議院と順次議政壇上に立つを目的とせし彼が府會議員の一席を占め、親友伊東痴遊等と應戦したるも僅に二三期、忽ち病魔の奇襲を受け溘焉この世を去つたのは大正四年二月十八日。

平素法華經の讀誦を怠らず、時々説教壇場の人ともなつた。法名は議乘院良延日明居士である。(藤の家主人)

## 二一つの蹟き

### 上、泣き面に蜂の自動車過殺

私が現在の妻と結婚したのは、今から十一年前の、私が二十四の時であつた。

當時の私は砲兵工廠會計課倉庫のトロツコ押しで、日給五十何錢、妻は同じく鞍工場の縫工であつた。

それまで私は多くの同僚と一緒に神田の夜學校へ通つてゐたのだが、この結婚によつて、中途廢學せねばならぬことになり、實際的經濟問題に逢着したのである。

もと／＼私共の結婚は戀愛の後に成立したものであつたから、妻は仲間の者へ遠慮して辭職してしまつた。同時に私も多くの友達を失つた。

今でも時々訪ねて来るG君の外は、誰一人私共を省みてくれる者はなかつた。

私共新夫婦は別に家を借りる資力もなかつたので、妻の家に厄介になることにした。妻の家は六疊と二疊と外に粗末な臺所があるばかりで、その中に義父と子供三人と、私共夫婦都合六人の共同生活であつた。

妻の父は私と同じ砲兵工廠の守警を勤めて月俸十四圓、妻の弟は博文館の給任に出て一ヶ月六圓を給されてゐた。

以上の収入でどうにか間に合はして來たのだつたが、その年の暮になると恐ろしい一大事が起つた。

妻の父が感冒にかゝつて、たつた四日間臥床したきりで不歸の人となつてしまつた。一家の經濟は根底から打壞されてしまつた。

仕方なく私が一家の面倒を見ることにしたが、休まず働いても十六圓なにかしの金である。當時妊娠中であつた妻を再び工場に働かせることにした。苦痛は今でも忘れない。

衣類を賣り飛ばしたり、辭書を質屋へ持つて行つたりしたが、それでも月末には八百屋や薪屋にまで申譯をせねばならなかつた。

課長に頼んで居残りまでして、夜遅く歸つて見ると、工場から一足先に歸つた妻は、大きな腹を苦しうにして内職にとりかゝつてゐた。

その後私は課長のお情けで同廠自動車の運轉助手になつた。勿論一文の増収もなかつたのであるが將來に望みをかけたのである。

半年の後、私は自分の手で自由に車を動かせるやうになると、早速運轉手に昇格した。給料も一圓増給され、妻のお産も無事に済んで、やれ一安心といふところで更に更に一大變事が突發した。

私が貨車を操縦して郊外の支廠へ向ふ途中、過つてやうやく歩行の出來るやうになつたばかりの少年を轢き殺してしまつた。私は其所から警察へ引致された。

課長や掛長が飛んでくる。私は一家全滅を覺悟して警部の尋問に答へた。その夜九時

ごろやうやく歸宅を許され、歸つて見ると産後二ヶ月の妻が腰の物と襦袢一枚で慄えてゐた。

### 下、運が向いてタクシーの主人

課長や係長の骨折りでやうやく事件は片づいたが、罰金の六十圓は給料から月賦で償還するのであつた。

貧しい生活には馴れてはゐるが、働いても働いても足りないには、夜も眠らず考へ明かした。

翌年の春になると給料をあけて貰つて、月收三十六圓となつた。そして借金も全部償還した時は妻と二人で相擁して泣いた。

妻もすつかり健康を回復したので内職を働んだ。私は日曜でも祭日でも車の修理や掃除に出動した。

ある日妻は内職で得た四圓幾らを預金したといつて通帳を見せてくれた。盆になると私は五十圓の賞與金を貰つた。歸るとすぐに妻に見せた。妻は喜んで佛壇にあけて手をあはせた。

その中に私の給料の一部も預金することが出来るやうになつた。

そしてその年の暮の賞與も全部入れて計算して見ると百七十餘圓あつた。

けれども私共夫妻は他所行の着物一枚なかつた。私は勤めに出る洋服一着、妻は私の古い兵兒帯をしめて働いてゐた。

その頃から物價はだん／＼騰貴しはじめた。米騒動があつたりした後で各官廳は一齊に給料を引きあげた。けれども生活費の高まるほどあけてはくれなかつた。

そこで餘暇には某會社の勧誘員もやつて見た。その中に私はやうやく幸運に恵まれた。

夜間ある運送店の貨物運搬を始めたのである。わづか三四時間の仕事であつたが、それでも晝間の分と合計百圓あまりの収入となつた。

私共は別段病氣もしなかつたので毎月四十圓内外の預金が出来た。盆暮の賞與は勿論その頃あつた青島戦役の論功行賞で戴いたのも全部局へ持つて行つた。そして大正九年の暮には四千圓となり、十年の暮には四千八百圓になつた。

十一年の三月のある日課長の前に呼ばれた。課長は莊重な口調で「K宮家から運轉手を招聘して来たのでお前を推薦して置いた」と言つた。私は恐懼して引き下つた。私はちよつと迷つたかうした重任が果せるかどうかと。しかし遂に思ひ切つてお引受した。

同時に工廠の方では軍縮で職工を減らして来た。私も所謂敵首者の仲間に入れて貰つて一千二百圓の公債證書を頂戴して、なつかしい工廠にお暇をつけた。

宮邸にお伺ひしてからは格別忙しい日もなかつたが、ついで若い運轉手が現れたので私はたつた三月でお暇を願つた。

六千圓の預金でタクシーをはじめた。今までの苦しい防戦とは反對にいさゝか追撃戦に移つた。一日四十圓ぐらゐ働いた日は妻も牛肉などを煮て待つてゐた。今は家屋も二臺の

自動車も完全に我物になつた。(代々木生)

## 良人を扶けて

### 上、實家の兄の罵聲から發奮

今もなほ、姉のお姑のうへに想をやる時、人しれずそこに畏敬の念を起さずには居られませぬ。姉のお姑は千野といひます。お話しいたしますのは、そのお姑のことでございます。

本所の呉服商の次女と生れた千野が、戀の祝福を得て、あはたゞしく結婚しましたのは二十の春でした。夫は某銀行に出てゐるので、山の手にさゝやかな家庭を営みました。

かうして過しました三年の後には、その楽しさも跡かたもなく崩れてしまつたのです。

ある夜、ふと隣家の火から家を焼かれ、夜のこととてなにも取り出すひまもなく。着のみ着のまゝ二人は逃げてしまつたのです。

僅かに枕の下に入れてあつた十圓ばかりの金を出したのみなので、火の消えた後、千野は夫と顔を見あはせてなにもいふことは出来ませんでした。

夫は親類もない。たつた一人の人でしたから、仕方がないので千野もともに本所の實家に行きつきました。

しかし千野の運命は呪はれてゐるのでした。三日ばかりたつと夫は前から悪かつた脚氣がおきて足が非常に太くなつて、しまひには立つことも出来ず、這つて歩かなければならなかつた。両親はすでに逝き、家をとつてゐる長女の夫が非常に無慈悲で、吝でしたのでかうなると厭な顔を見せて出てゆけがしに扱つてならないのでした。

勝氣な千野は、そんな態度を見るにつけて口惜しく、ある時「脚氣の厄介者が」と雇人にいつたのを聞き、急に發奮してどんな苦しい思ひをしても、立派に家を立てなければと

心をきめ、脚氣の夫をつれ實家を出てしまつたのです。

かうした身ゆゑ、それに夫は銀行を止してをりましたし、金などありやう筈はありません。千野は借金までした下谷に小さな家を借りました。

「かつけの厄介者が」焼け出され奴が「かうした雑言を千野は心にしつかと結びつけました。たとへ一文なしの身からでも成功出来ぬことは決してない。わたしは立派になつてみせる。人間である以上女の細い腕でも焼け出されでも、きつと立派に暮せるやうになつてみせる人間ぢやないか、千野はかうした信念を抱いて、前途に光が輝いてゐるのを見る如く、希望と信念とで輝いて世間の荒波へ飛び込んだのでした。

もとより資本などありやう筈はありません。脚氣の良人をかゝへ、千野は細い腕一本にたよつたのでした。で、色々考へたすゑ、その近所の封筒工場へ通ふことになりました。

千野の眞實さに働まされた夫は、字の書けるところから、ほつ／＼近所の人に代書などしてやつて居りました。千野は家を起すまで起すまでと働けるだけ働きました。

## 下、愛より生れた身の幸

夜、工場をしまつて歸つてくると足袋の内職をしました。馴れない工場の冷たさに、千野はいく度悲しく思つたか知れませんが。しかしそんな時には、きつと實家にゐた頃を思ひ起して、働くのでした。

夜の内職と夫の得た金は貯金をしました。千野は將來の樂しさを夢みつゝ、満足に働いてゐました。借金も少しづゝかへしました。夜、十二時一時頃まで千野が内職をすると、夫は心配して一緒に起きてゐてくれることなどありました。

それは何といふ苦しい家計でしたせう。又樂い家庭でしたせう。千野も心から夫を愛して、それはよく看護をしました。

なりもふりもかまはず、熱心に律義に働きました。夫の病は癒らぬといつてもいゝものに進んでゐました。かうして過すこと六年、千野は工場へ通ふことが出来ないやうになり

ました。

千野は妊娠八箇月になつたのです。仕方がないので貯金を調べた時、どうにか何かの資本になるだけありました。借金はすでにかへしてゐました。

考へぬいたあけく、荒物屋を始めることになりました。近所に子供が多かつたので駄菓子子も賣りはじめました。

店々とゝのへた時、六年の間一心に働いて得た資本の、千野の手に残つたのは、たつた二錢でした。その心細さはありません。この商賣が損したならば六年間の苦心も何もかもくづれて、又元にかへらねばならないのです。

然しこの時分は、今のやうに荒物屋はありませんでした。損して徳とれ主義の千野が、良いものを大變安く賣つたので、遠くの町からずるぶん買ひに来るやうになりました。

この商賣はたしかに當つたのです。千野も夫も嬉しさに涙さへこぼして喜びました。千野の一日として忘れないのは、心に誓つた言葉でした。



千野は角の仕立屋から思ひつき「素人おしたてものどころ」といふ看板をあけました。夜は猶も内職をしたのです。それからどんなに働いたでせう。店は飛ぶやうに賣れて、面白いやうに儲かつてゆくのでした。千野は皆その金は貯金しました。

そのうちに千野は可愛い男の子を生みました。幸福は一度に來たのです。今まで耐へて來た苦しみに報はれる時が來たのです、男の子が七つになつて小學校へ通ふやうになつた頃、貯金は萬の上まで及ぼしてゆきました。

長男が大學を卒業して立派に一家が支へるやうになつた頃には、よく賣れる店を譲り、山の手引きこもりでしたが、今なほ自分の着物は自分で縫ひ、若い者におくれぬやうに一心に勉強したりして勉めて居ります。

親しいやさしいお人で、私など可愛がつてくださいます。(△△子)

## 石炭と水晶

### 上、しよんぼり立つた飯田河岸

「こんな山の中に引込んでゐたんぢやあ……」と彼が一握千金の大望を東京に抱いて、明治四年甲州の山奥を飛び出したのはちやうど廿六の時であつた。

彼とは甲州東八代郡右左口村の小百姓の家に生れた齋藤利三(假名)である。洗ひざらしの浴衣に脚絆がけ三十圓たらずの金を懐ろに捻ら込んでひそかに郷里をぬけ出した彼は、三日目の夕方に生れて初めての東京の地を踏んだ。

新宿大木戸の相模屋といふ木賃宿に草鞋をぬぎ、その夜は不安のうちにも旅の疲れでぐつぐつと寝込んでしまつたが、さて翌くる日になると、彼はある淋し味を感じて來た。

金塊がいたる處にころがつてゐる東京、金儲けが眼の前にブラさがつてゐる東京、さうばかり考へてゐた彼の想像は根底から覆されてしまつた。

朝から夕方まで克明に働き、口を漁りあるいたが保証人一人ない山出しの彼を、誰一人として使つてくれる者が無い。

かうして幾日かを過ごしてゐる裡に、持つて来た卅圓ばかりの金は、ドン／＼減つて行く。輕率に故郷を飛び出した淺墓を心から悔いては見たが、今さらおめ／＼と親元へ歸ることも出来ず、一層のこと死んでしまはうかしらなどとも考へて見た。

一日彼はあてもなく相模屋を出た。そして今の砲兵工廠の前を通りかゝると、多くの人が掛聲面白く傳馬船からセツセと石炭の河岸場をしてゐるのを見た。

山家育ちの彼には人夫の働き振りより、天秤の兩端にブラさがつた石炭に物珍らしさを感じた。「一體あの黒い石は何んだらう？」さうした好奇心から彼は思はず河岸の方へ歩を移した。

するとそこに建てられた人夫小屋の羽目板に「人夫入用」の貼り紙がしてあるのを發見した。野良仕事にガツシリした體格の持主である彼は「これなら俺に出来さうだ。一つ使つて貰はう」と彼は小屋の窓から首を突つ込んだ。

「私を人夫に使つて下さい」ギョロつとした眼で、彼の頭の前から爪の先まで見てゐた人夫頭らしいのが、「お前にあの石炭が昇けるかい？ なかなか樂ぢやねえぜ。」と言つた。「エエ昇けますとも。」と彼は自信があるやうに答へた。兎も角もといふので河岸へつれて行つて昇がせると樂々と昇いだ「宜し使つてやらう」彼はその日から日給二十一錢で河岸人足に傭はれることになつた。

五年間彼は飯田河岸の人夫小屋に乞食のやうな生活をしてセツセと稼いだ。毎晩のやうに開帳される賭博にも阿彌陀の冷酒にも一切手を出さず、たゞ腕一本を資本に彼は一心不乱に稼ぎつゞけた。

## 下、二百圓が一躍五千圓に

一心の力は恐ろしいもので、かうして骨身をしますす働いた彼は、足かけ五年目に二百圓といふ大金を貯へた。

話變つてこの頃麴町の飯田町三丁目、ジエームス(假名)といふ英國人が住んでゐた。歸國するについて、日本特産の水晶を持つて歸りたいが出帆までに間がないし、東京の水晶店をあさつたが、加工して印材になつたものばかりで、ジエームスが希望する掘出したままの自然水晶が皆目ない。

フトしたところからそれを耳にした彼は、一夜ぶしつけにジエームスの家を訪れた。そして自分の郷里が甲州である關係から、きつとその水晶は貴方の歸國までに間に合はせてさしあげませうと、通譯を介して話し込むと、なにしろ望みの品がないので落膽してゐたジエームスは大喜び「値段は幾程でもよろしい、是非間に合はせて下さい。」と折入つての

頼み、彼は得たりとばかり五年間の汗で築きあげた二百圓を懐中にその晩すぐ甲州さして出發した。

ジエームスの出帆までにはわづか六日間あるばかりだ。猿橋、笹子の難處もなんのその東京を發つてから二日目の正午すぎに、彼の姿は水晶の原産地甲州金峯山の麓に立つてゐた。

彼はそこで二百兩全部を投げ出して水晶を買ひ込んだ。優等品劣等品こみで四捆の水晶を二匹の雇馬につけてすぐその足で東京へ引返した。

不眠不休の努力で、彼が四捆の水晶をジエームスの許に提供したのは、東京出發後わづか四日目の晩だつた。

ジエームスは雀躍りして喜んだ。同時に彼の絶大の努力を感謝した。ところで四捆の水晶だが、なにほどの價を支拂つたらよいかと、ジエームスは訊ねた。

その時彼は右掌を開いて見せた。二百圓の水晶が五百圓に賣れ、ば結構だ。駄賃をさし

いても優に二百五十圓は儲かると、彼は手を開いて五百圓を要求したのである。「たつたそれだけで宜しいのですか」とジエームスは彼の前に金貨を並らべた。それは五千圓であつた。

彼が五百圓の意味で右手を開いたのを、ジエームスは一桁上げて五千圓と考へたのであつた。

大金を前にして彼は受くべきか受くべからざるものかを躊躇した。「高いどころか、むしろ安價であると渡してくれたこの五千圓は、俺に授かつた天の賜物だらう」と彼は五千圓を押し戴いてジエームスの家を出た。

その後彼は甲府に歸り、右の五千圓を資本に雜穀店を開業し、土地屈指の資産家になつたが、八九年前になくなつた。

彼が石炭昇き時代に使つた神繩と股引は、今に至るも彼の家の寶物として、保存されてゐるさうだ。(愁峽亭)

## 水火の責を経て

上、始めて喰べる他人の飯

滿れば缺くる習ひとはいへ、ふとしたことから、父が商賣に手を出したのがもとで、失敗に失敗をかさね、關係の會社の瓦潰、銀行の破産等の不幸つゞきに、さすが戸長様上宿の大盡と唄はれた岡山正造氏の歴とした家柄も、一夜の夢と消えて、田も畑も住みなれた家屋敷まで、人手に渡さなければならぬ破目におちいつてしまひました。

それは明治三十年代の、氏がまだ十三歳の時で、泣く泣く村はづれの小さな家を借りてそこに引越すことになりました。

けれども父が丈夫な内は、どうにかやりくつて行けましたが、ちよつとした風邪がもとで

どつと病の床につくやうになつてからは赤貧洗ふがごとく、それが一年二年とながびくに  
 随ひ、冬が来ても拾一枚重ねる事が出来ず、明日の煙もあけかねるやうになりました。

座して食らへば山でもものたとへ、ましてや既に困難に沈んだ後のこととて、家財道具も  
 大分に賣りつくし、醫藥に替へる物とてもなく、止むを得ず叔父さんの宅に無心にあがつ  
 たのですが、慾一點ばりの叔父は鑑一文貸してくだされませんでした。

自分はどうな辛抱もするが、子供たちに明日からどうして食はせやう。明日からなんと  
 いつて藥を戴いて来やうと思ふと、さすが氣丈な氏の母も涙に暮れました。

氏は叔父の非道を憤り、母の止むるのも聞かず、學校を中途でさがつて、村長の宅に  
 奉公に行くことにしました。

置く霜白き且寒風身を刻ざむ夕か弱い細腕で多くの作男と一緒になつて働かうとい  
 ふのですから、どんなに辛かつたでせう。

しかし自分が一生懸命働けば両親も幼い弟達も、饑しい思ひをさせないですむのだ

から、自分はどんな辛抱でもしなければならぬと、自ら働まして働いて居りました。

年も行かないにほんに感心な見だ。こんな話しが近所の人の茶呑み話しに出るやうに  
 なりました。

氏はかゝる噂を聞くにつけ、猶さらに精出して働きました。月日の駒に關守はなくはや  
 常家に参加つてから一年になりましたので、久振りで我が家を訪れました。

喜んで迎へる母や弟より、病床の父がやせ細つた手を出して、「お前にだけはせめて勉  
 強をさせ、家名を揚げてもらはうと思つたのに私が病氣のために心配をかけてすまない。」  
 と涙ながらに氏の手を握りしめました。

後になつて見るとその時が別れたつたのであります。それから五六ヶ月経つて、父が大  
 分宜くないからと、知らせが参りました。取るものを取りあへず駆けつけた時には、もう  
 事切れて居ました。

泣く／＼野邊の送りをすまし、あまりのことしはし呆然として居りましたが、かくて

はあらずと漸く氣を取りなほして、主家から暇を取り、これから自分の細腕を資本に家名を復興すべく固く決心しました。

### 下、十年一日の農事改良から

それから田を少しばかり借り受け、朝早くから夕晩くまで耕し、家のまはりの荒地を起しては野菜をつくり、人の田畑を受け負つてはまた耕すほか、暇には薪を採り繩を編ひ、草鞋などをつくりなどして仕事を勵みました。

ある時馬糞を拾つて是を作物に施したところ、意外の成績を示したので、それから人の休む日を見ては道路に出て倦まず拾ひ集めました。

その間、或は若者に罵倒嘲笑され、又は悪少年に取りかこまれ、折角拾ひあつめた馬糞を投げ出されて、口惜し涙に暮れることも度々でした。

けれども堅忍不拔の精神は、ますます意志を強固ならしめたのであります。又養蠶業の

有利なるを知るや、畑一反五畝歩を借り桑苗を求めて、拾ひ集めた馬糞を施肥に桑を植付けました。

そのうち秋となつて植付けた田から五俵の收穫を得、その内二俵を地代に納めました。後の三俵の前に立つて、是が自分の全力を注いで奮闘した汗の結晶だと思ふと、涙の出るほど嬉しかったのです。

しかし小作をもつて満足するやうな氏ではありませんでした。もとより田畑を買入るべき餘裕もないので、小作の餘暇村長に願つて、數年前水災のため荒地となつてゐたところを開墾し初めました。

風雨と戦ひ、寒暑に戦ひ、熱心と努力とは數年後三反五畝餘歩の地主となることが出来ました。

そして草を刈り、麥の間に大豆を蒔いて綠肥となすなど、勤勞の結果相當の利益を得たので、それを資本に蠶具を求め、翌四十三年初めて蠶を掃立てましたが、不幸にして經驗

の浅い氏は全部失敗に終りました。けれども不撓不屈な氏は益々桑を植つけました。

その年八月上旬から降りつゞいた大雨は十数日に及び、入間川の水嵩まり、遂に堤防を切つて數百町歩の田畑も家もその中に呑んでしまいました。

幸ひにして家だけは流されませんでした。氏が十餘年の間粒々辛苦の結果得た田も畑も石の河原となつてしまひました。

さすがの氏も思はず嘆息をもらしましたが、さうだ自分には自分を養つて行けるだけの立派な腕があると、その年堤防工事があつたのを幸ひ、毎日人夫に雇はれ積財に心がけました。

翌四十四年、村で蠶業講習を開いたので氏は朝早く一日分の仕事を働らき、その講習に出て、夜の間も眠らず世話したため非常な効果をあげたので、益々桑を植付け、その一方以前の田を起すなど致々として生業に精勵し、やうやく村の信用を得た時、又も火災の不幸に遭遇、粒々辛苦の結果得た家財道具を烏有に歸してしまひました。

それより十數年、困難苦痛に遭遇すれば、尙意志を強固に、百難を排して遂に村一番の資産家となり、二十餘年前父が失つた何倍かの礎を築き、今や村の模範人物と仰がるゝにいたつたのであります。(錦種生)

## 記念の律天

### 上、美音の線路工夫龍さん

遠州濱松は広いやうで狭い……美音をほこる龍さんの聲が咽喉から消えさらないうちに「ドッコイシヨ」と幾本もの鶴嘴が威勢よく揃つて打下ろされる。

明治二十年前の濱松の地は、力強い意氣込みで興されてゐた。その頃の濱松は手を數へる程の人家が、揃んでなけつたやうに彼方此方にたたくと置かれて、冬の夜など

は名代の遠州風しが吹き荒み、夜毎に西北の城跡から狐の鳴き聲が聞えて淋しかったと語り傳へられてゐる。

現時の繁昌は、到底想像外であつたらう。濱松の發展の基礎ともいふべき鐵道線路工事が始まつたのは、ある年の秋もすぎた冬の入りかけであつた。

森川組は工事を一手に引受けたほど、その傾勢力のあつた土工組合であつた。

町の境を東から西へ走らせやうとする線路の工事場には、いつも數十人の荒男が汗と戦つてゐた。

美音の龍さんは彼等の中の紅一點であつた。誰でも一見すれば根が相當な家の息子であつたに違ひないと合點するくらゐ、彼はきやしやな體の持主であつた。

しかし彼の前身が何であつたか誰も知らない。又聞かうと試みる者もなかつた。

龍さんの美音は、音頭以外には土工仲間て評判の吝嗇坊の名の下に、あたり一蹴されてしまつてゐた。

十錢あれば鰯腹食べたり飲んだりしたその頃ゆゑ、彼等は毎夜部屋で飲んだり打つたり、欲しいままに道樂をつくしてゐる中に、龍さんだけは、それらに目をくれず、自分の目的に向つて進んでいつた。

さういふ事が仲間て反感をたかめ、寄つてたかつて脅かしたり、いじめたりして、龍さんの泣顔を面白がつて手を拍つた。

そこには全く無智なる者のつどひで、あらゆる慘酷な争鬭や、思はず顔を外向けしめる猥褻談が、あたり構はず不斷に濁つた空氣といつしよに流れてゐた。

ひたすら目的に向ふ理性の龍さんにも、矢張り身内には若い青春の血がうづまいて流れてゐた。

無意識に肉を教へられた心は、いつか若い美しい女を見れば、ともすればそれに走らうとするやうになつた。

朝六時前から晩の七時近くまで、鶴崎の柄の一つところを握り締め、一塊の土を掘起す



ためにも全身の力が込められ、一日中にはさうしたことが何百遍も繰り返される。

かうして得た日給五十銭は龍さんには涙が出るほど有難かつた。

二月もすぎた頃の龍さんの白い腕はいつか黒く變つてゐた。黒い皮膚の下には逞しい筋肉と骨が盛りあがつてゐた。肉慾の心が次第に全身を占めていつた。

抑制は自然に反抗する不自然なもので、結果は前以上の偉大なる力のためにぐんぐん龍さんの身體を、町の白粉臭い巷へと押し出していつた。

遂に龍さんは荒男の凄い科白に誘惑されず、弱い自分の心に誘惑されてしまつた。

### 下、女の言葉から生れ代つて

かくして龍さんの汗と塵の中から生れ出たいくらかの貯金は、數夜の快樂に代へられてしまつた。

一日一心に働いて得た金は、一時間足らずで消え去つてしまふ。理性の蘇返つた心中で

は汝は馬鹿だと罵つても、翌日は又馬鹿になりきつて、惜気もなく費してしまふ。

夢のやうな力のない日が幾日かつた。脰掛の井ぶりから消えて行く銀貨の最後の一つが、彼の手から離れた時彼の目は醒めた。

失策つたと思つたが後の祭り、差引残つたものは快樂の後の淋しい氣分ばかりだつた。しかし龍さんの幸福は、これが始まりであつた。龍さんの馴染んだ女は水稼業にまれな理性の勝つた女であつた。

そして二人の仲は眞實の戀に燃えてゐた。龍さんが目醒めて、最後の日にある決心を抱いて女の許へ行つた時、女は眞から眞面目に龍さんの生活を變へるやうにせまつた。

元より龍さんには土工などに執着があらうはずがなかつた。その晩彼は彼女のために、彼女は彼の爲めに一生を託し合うと誓つて別れた。

翌日から龍さんの美音は森川組に聞えなくなつた。それから間もなく龍さんの姿は、あの飲料工場の配達夫となつて現はれた。

雨の降る日も風の日も、町から町へと飲料水を卸して歩く彼の姿は、どこかで見られない日はなかつた。かれこれ十年も数へられたといふその陰に、馴染の女お勝さんが助けてゐたのである。

彼が外歩きを止めて工場内の製造に従事しはじめてから、十年の星霜は夢とすぎた。一意専心工場主のために盡した彼は、既に主人の心中深く喰ひ入つてゐた。

日清日露と戦争が重ねられてから、まだ町の人々は戦勝に酔つてゐた。なんでも品物はよく賣れよく騰つていつた。

そんな出来事も知らぬ顔に、雨は降り風は吹き花は咲き又散つていつたと共に、濱松の地も發展から發展へと忙しい道程を走りつゞけた。

明治四十一年、濱松のある目抜き通りの新しく立派な飲料水販賣店が開かれた。廣瀬龍三郎商店の看板は通行人の誰をも一度は見あけさせた。誰あろう、彼の美音の龍さんその人であつた。

力強い忍性は彼をして物質闘争場の勝者の名をなさしめた。そして主人からは三國一の婚養子ぢやと、近所隣りへの自慢の種となつた。

昔に變る彼は押しも押されもせぬ市の財界の有力者として、その權勢の前に多勢の頭を下けさせた。「世の中が幾度變つて行つても、やはり大自然は私共をその中に包みこんで行くところまで行きますわい。」震災後のある夜、ある人々にさう語つた彼の老顔には、若々しい血が漲つてゐた。

昔忘れぬ記念の印神天は今でも箆笥の底深く秘められて、彼の歴史を飾る唯一の口聞きとなつたが、彼を助けたもう一人の彼女のその後は話されなかつた。(青峰生)

## 腕一本を資本に (終り)

大正十三年九月二十二日印刷  
大正十三年九月二十五日發行

不許複製

腕一本資を本に

【定價一圓五十錢】

著作發行者

吉川庄一郎

印刷者

東京市芝區南佐久間町一ノ二  
松澤平吉

印刷所

東京市芝區南佐久間町一ノ二  
會社名 弘文社

發行所

東京市麹町區內幸町一丁目五番地  
電話青山一五三二七七五  
櫻井口座東京七五二七

都新聞社出版部

三 版 出 來

# 恐るべき金の力

發賣されると共に一版二版が賣切れました。  
素敵に面白い讀まねば損、讀むと爲めになる本です。  
恐るべき金の力！  
恐るべき女の力！  
それが湧くが如き感興と共に讀む人の心一つで一種の處世訓として立派に役立つものです。是非一本を左右に備へんことを

定價壹圓二十錢

送料十二錢  
書留十八錢



わが都新聞 は、常に新時代の第一線に立つ日本唯一の朝刊十二頁新聞である。實益と趣味に富む、明るい、親切な、責任を重んずる新聞である。政治經濟、商況、社會記事、演藝、家庭、文藝等の各分派に亘り全社員の努力を傾注せる迅速、誠實、平易、懇切なる報道は、あらゆる家庭の白熱的歡迎を受けて他の追従を許さざる健實なる新聞である。都新聞は新聞の米の飯であると共に山海の珍味でもある。都新聞は時世に遅れざらんとする人の讀む

新聞にして、人生行路の一大羅針盤である。

**第一面** の「讀者と記者」は讀者のために紙面を割愛して、責任ある記者の回答と共に、誠實なる讀者の聲として斯界に定評あるもの。同面掲載中の「亂れ焼刃」(本田美禪氏作)は徳川時代風俗の活資料を題材とした通俗的な面白い時代小説である。

**第二面** の「政治記事」は近時異常の發展をなし、一黨一派に偏せず、敏速清新なる報道を以て鳴り、

**第三面** の「一事一言」は社是の表現とも見るべく、健實温健なる筆致は常に民心の覺醒時代先驅者の聲として重きをなし、「經濟記事」は特に他新聞に優越し、**第四面**、**第十二面**の「商況面」と共に本社のみそかに誇りとするとところである。

**第五面** の「文藝欄」は新進花形の觀あり、「相談の相談」は第一面の讀者と記者欄同様讀者のよき相談相手となり、着實なる記者の回答と共に好評あるもの。

**第七面** の「演藝欄」は十年一日の如く斯界に重きをなし、小説「輝く都會」(北尾龜男氏

作)は亂れ焼刃と共に井川洗屋氏の艶麗なる挿繪と相待つて興味深きもの。

**第九面** の「家庭面」は常に實生活に即した衣食住の記事を滿載して懸賞募集の讀物、寫眞小説「秘藥紫雲」は竹久夢二氏の作及び畫にて好評噴々、引續き目下千五百圓の賞を懸けて募集中の小説が紙上を賑はす筈である。

**第十面**、**第十一面** の「社會記事」は趣味深く且つ堅實なる報道に優れ、毎月曜には二頁の「月曜の讀物」を附し、各面共に他の追従を許さざる卓絶せる編輯振と共に清新の氣を紙上に横溢せしめてゐる。

(定價一ヶ月一圓二十錢)

發行所 東京市丸の内 都新聞社

れ切賣版三ち忽

# あ息る子 あ娘る娘

嘗て本社が懸賞募集して紙上を賑はし、且家庭の好  
讀物として好評を博した『ある息子ある娘』の佳篇四  
十三を收めたものであります。若き男女のあらゆる  
生活、若き人生の明暗表裏その若き男女を中心とし  
た環境のいろ／＼が累々たる社會相と共に各人の胸  
に千種萬種のシヨックを與へます。收むる所の四十  
三篇、ことごとくが事實談であり、見やうによれば  
ことごとくが個々別々の奇しき且面白き事實小説で  
もあります。一般及び家庭の好讀物として推奨する  
に足るものと信じます。

定價 金一圓二十錢  
送料 金十八錢

527

50

終